



**Data**

監督：越川道夫  
 原作：島尾ミホ『海辺の生と死』（中公文庫刊）、島尾敏雄『島の果て』ほかより  
 出演：満島ひかり／永山絢斗／井之脇海／川瀬陽太／津嘉山正種

## 👁️👁️ みどころ

演技力ピカーの若手女優、満島ひかりが4年ぶりに主演。時代は戦争末期、舞台は彼女の出身地に近い奄美大島の奄美カゲロウ島。そして、テーマは特攻隊員と島娘とのはかなくも美しい恋だから、こりゃ必見！

そんな期待は、ストーリーが進むにつれて少しずつつしぼむことに。東洋文学を学んだ大学出の特攻隊長は軍務にも恋にも励み、見事特攻艇で敵艦に体当たり！そして、残された恋人は・・・？

そんな展開を勝手に想像したが、本作のモデルとなった島尾ミホと島尾敏雄は2人とも生き延びて結婚し、ともに小説を書いているから、アレレ・・・？  
 奄美カゲロウ島での戦争の悲惨さの無さにビックリする中、興味の対象は2人は一線を越えたか否かという点にかかってくるが、さて、その真相は・・・？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■満島ひかりが主演！こりゃ必見！そう思ったが・・・■□■

園子温監督の『愛のむきだし』（08年）で受けた強烈な印象によって満島ひかりという女優の名前と顔をしっかりインプットし（『シネマルーム22』276頁参照）、以降の素晴らしい活躍に目を細めていた私にとって、彼女の4年ぶりの主演映画と聞けば、そりゃ必見！しかも、奄美諸島で撮影されたという本作は島尾ミホの原作『海辺の生と死』というタイトル通り、戦争末期の「神が宿る」と言われる神秘的な奄美カゲロウ島（本名は加計呂麻島）を舞台とするもの。そして、物語は奄美カゲロウ島で国民学校の教師をしている島娘トエ（満島ひかり）と特攻艇隊を率いる隊長で海軍中尉の朔（さく）（永山絢斗）とのはかない恋だ。

朔中尉、その部下の隼人少尉（川瀬陽太）、そして、朔の世話をする大坪兵曹（井之脇海）たちは、特攻任務のために奄美カゲロウ島に赴任してきたのだから、任務遂行までの滞在の時間はそれほど長くないはず。しかも、乏しい情報下ながら、ストーリー上では広島に新型爆弾が投下されたことも大坪の口から報告されていたから、特攻隊員たちの命は当然あとわずか……。そんな短い期間だからこそ、若い男女の恋ははかなくも美しく燃え……。そんな期待でいっぱいだったが……。

## ■□文学青年が特攻艇の隊長に！そんな時代だったが……■□

九州大学文学部で東洋文学を勉強した朔が地元の娘トエ（満島ひかり）と知り合ったのは、トエの父親（津嘉山正種）に対して朔が兵隊の教育用に本を借りたいと頼んできたのがきっかけ。特攻隊員達の気が高ぶっているのは当然で、隼人少尉は隊員たちと「同期の桜」を大声で歌っていたが、朔中尉は、「あんな歌より、島唄を覚えたい」というから、かなり変わっている。また、トエとの会話でも、モンゴルの話や中央アジアの話、そして、世が世であれば、中央アジアで活躍したいと語る姿などを見ていると、軍国主義一色に染まる当時の日本ではかなり珍しいキャラだ。本作は若い2人の思惑（志）とは逆に特攻で戦死もせず、また愛する特攻隊員への殉死もしないまま戦後生き延びて戦後に結婚し、共に小説家となった島尾ミホと島尾敏雄をモデルにした映画だが、本作を観ていると、戦争当時から2人とも理屈っぽかったことがよくわかる。

しかし、学徒動員を強制された大学生たちの心の叫びを綴った『きけ わだつみのこえ』（47年）（東京大学協同組合出版部刊）からわかるように、学徒出陣によって戦地に赴き、死んでいった多くの大学生たちの姿と、本作にみる朔の姿に私には大きな違和感がある。「陸軍が嫌だったから海軍に入った」「いざ戦闘となれば指揮はすべて隼人少尉に任せるが、特攻艇で死ぬのは自分が一番だ」という発言にも、特攻艇隊の隊長としては少し投げやり感が……。また、「ロクに訓練も受けていないから」とか、「こんなベニヤの船で……」等の不平不満の言葉が平気で出てくることにビックリ。ちなみに、8月3日の内閣改造直後の5日には江崎鉄磨沖繩・北方担当相が、地元の会合で「（誤った発言をしないように）役所の原稿を朗読する」とか、「（北方領土問題については）素人は素人だ」と発言したことが問題視され、7日には「言葉足らずだった」と陳謝したが、それと同じように、朔が「素人だから」と未熟な軍人ぶりを売りにするような発言をするのは如何なもの……？素人なら素人なりに、訓練期間が短いなら短いなりに、出撃までの短い時間を恋にうつつを抜かさないうで（隼人少尉の言葉によると「乳繰り合わないで」、ベニヤ板の特攻艇を動かす訓練をすべきなのでは……？

## ■□デートばかりでいいの？特攻出撃までの軍務は？■□

スクリーン上では一度だけ、朔中尉が地図を広げながら作戦を練っている（かのような）

シーンが登場する。しかし、観客には奄美カゲロウ島がどんな地形をしており、どこに集落があり、どこに特攻艇を隠し、朔大尉とトエがどこで逢引きしているのか等がさっぱりわからない。したがって、2人のデートの場所とされた「塩焼き小屋」がどこにあるのかがわからないから、私たち観客にはせっかくデート用の綺麗な服を着て人に見つからないように朔に会いに行くのに、わざわざ「海の道」を通ってずぶ濡れになってしまう苦労がわからない。秘密のデートの場所は、他にいくらでもあるのでは・・・？

また、朔は特攻隊隊長になったため「にわか中尉」の位についていると思われるが、そんなレベルの軍人に大坪兵曹のような当番係がホントにつくの？本作を見ている限り、朔が軍人として何かの軍務を果たしている姿は全く登場しないし、大坪兵曹がそのためにどんな仕事しているのかも全く見えない。本作を観る限り、大坪兵曹の仕事は朔のトエに対するラブレターを届けるだけだから、こりゃあまりに兵隊の無駄使いでは・・・？

ちなみに、朔中尉が「こんなベニヤ板みたいなの・・・」とバカにしている特攻艇は、雨が降り続く中で濡れて一部腐ってきているようだし、エンジンをかけようとしても全然かからないらしい。朔はその特攻艇に自爆用のダイナマイトを積んで、一番に出撃して自爆するつもりらしいが、それでも何度かは特攻艇を実際に操縦して海に出てみる必要があるのでは？また、うまくいけば敵の軍艦に体当たりさせるのだから、全力走行させれば時速何キロくらい出るのか等々の訓練もやる必要があるのでは・・・？しかし、スクリーンを見ている限りそんなシーンは全くなく、スクリーン上は2人のデート姿ばかりだ。そしてある日は、部屋の中に敷かれた1つの布団と2つの枕の上で下着姿のまま2人で抱き合うシーンまで・・・。軍務を何もしないで、隊長自らこんな（ふしだらな）ことばかりしていて、日本帝国軍人はホントにいいの・・・？

## ■□■「一線」を越えたの？越えていないの？■□■

かつて、私の娘が大好きで、私もカラオケでよく歌っていた女性ボーカルグループ「SPEED」の今井絵理子が自民党の参議院議員に当選したことにはびっくりしたが、今年7月にはその今井議員の略奪不倫スキャンダルが発覚し、相手方との間で最後の「一線」を越えたのか、どうかが大問題になっている。他方、中井貴一は、近時コメディ的キャラが多くなっているが、映画デビューした松林宗恵監督の『連合艦隊』（81年）では、父親の佐田啓二と同じようにキリリとした美青年ぶりが際立っていた。同作では、永島敏行扮する沖縄特攻に赴く戦艦「大和」の乗組員本郷英一中尉は、出撃前に結婚式を挙げたものの、戦死を覚悟して初夜でも「一線」を越えなかったはず。また、あおい輝彦が小賀武志役で主演したオールキャストの『二百三高地』（80年）でも、結婚した小賀武志は、戦死を覚悟していたため夏目雅子扮する新妻との間で「一線」を越えなかったはずだ。

しかして、本作における朔中尉は特攻隊の隊長として奄美カゲロウ島に入っただけでトエと知り合い、島唄とトエの父親との講義を通じて仲良くなりデートを重ねたようだが、

すぐに「一線」を越えていたの？それとも、越えていなかったの？本作の公式ホームページには、「やがてトエは朔と逢瀬を重ねるようになる」と書かれているから、普通それは「セックス関係あり」と解釈できるもの。そして、スクリーン上には前述した布団と枕、下着姿の2人が登場するから、誰でもこの2人はすでに一線を越えていると解釈するはずだ。しかし、いかにも生身の女らしい情念と情欲をスクリーン上に漲らせるトエに対して、朔はいつもクール。少なくとも自分から積極的にトエの身体を求めたり、若い男特有のむさぼりかかるとは全く見せないから、こりゃ不思議、不自然と言う他ない。

本作の原作は、島尾ミホの『海辺の生と死』。本作に主演した満島ひかりと永山絢斗の2人は、本作完成後「いつか『死の棘』もやりたいね」と語りあったそうだが、実際にミホは共に生きて終戦を迎えた島尾敏雄と1946年に結婚したらしい。そして、島尾敏雄の代表作となった『死の棘』には、トエは夫の浮気を責め続けて心を病んでいく妻として登場するそうだから、所詮朔だって生身の男のはずだ。したがって、明日にも特攻に赴くという精神状態の中、あれほど情欲を示しながら身体をぶつけてきているトエに対して、肉欲を無視して（我慢して？）「一線」を越えないままだったとは私にはどうしても考えられないのだが、さて真相は・・・？

## ■戦争色はほとんどなし！これでは・・・？■

昨年末から今年にかけては、片淵須直監督の『この世界の片隅に』（16年）が大ヒット。同作はアニメだが、広島と呉がたびたび空襲にさらされる姿や広島への原爆投下の姿が生々しく描かれていた（『シネマルーム39』41頁参照）。広島長崎の原爆投下の悲劇と共に、『ひめゆりの塔』（53年、95年）をはじめとする沖縄戦の悲劇は多くの日本人が知っているが、さて本作の舞台となった奄美諸島のカゲロウ島はどうだったの？奄美諸島の1つであるカゲロウ島は沖縄に近いのだから、敗戦直前には同島にもかなりの悲劇があったはず。

そう思っていたが、2時間35分という長尺の本作はそのほとんどが朔とトエの恋愛シーンに費やされ、戦闘シーンはゼロ。爆撃シーンも学校の窓ガラスが割れたり、子供たちを連れたトエが1度だけ爆弾を落とす飛行機に出くわすだけだ。また、トエの父親たち集落の人々が防空壕に入り、手榴弾で一斉自決するようなシーンも登場するが、現実にはそんな悲劇はなかったらしい。さらに、1945年夏のカゲロウ島が暑いのは当然だが、トエがデートの時に着ているワンピースも上等そうだし、朔の出撃の日にトエが着ていく着物（喪服？）も上等そう。朔だって、出撃の日の特攻服は新品の立派なものだし、首のマフラーの巻き方も一流のスタイリスト並み・・・？あの当時は、カゲロウ島だから食べるものはともかく、着るものなんてろくなものがなかったでは・・・？

本作の脚本を書き監督した越川道夫は、公式ホームページで「満島さんは、島尾ミホさんをモデルにしたトエを演じ、彼女の戦時中の恋とその時代を、激しく狂おしいまでに駆

け抜けていきました」と語ってる。たしかに、島の方言や島唄、そして、集落の姿。さらには、トエと子供たちの授業風景等を見ていると「神の島」と呼ばれたカゲロウ島の雰囲気とそこで生まれたばかりの恋の瞬間の閃きはよく描かれているが、現実は本作とは全く違うのでは・・・？

せっかく満島ひかりという若手ながら希代の名女優を迎えながら、これでは中途半端で、せっかくの良いネタと良い女優を十分生かし切れていないと言わざるを得ない。実に残念だ。ちなみに、キネマ旬報8月下旬号でも、3人の映画評論家の採点は、星2つ、3つ、3つと低いことも付け加えておきたい。

2017（平成29）年8月10日記